

義認論の諸問題

—「ルーテル・カトリック

義認の教理についての共同宣言」をめぐって

江口再起

一、共同宣言の調印

一九九九年十月三十一日、ドイツのアウグスブルクでルーテル世界連盟(LWF)とローマ・カトリック教会の間で『義認の教理についての共同宣言』(以下「共同宣言」と略⁽¹⁾)が調印された。画期的なことである。なぜなら、義認論はプロテスタント諸教会とカトリック教会との分裂対立の主要な原因であったからである(G E13 参照)。わけでもルター派にとって、義認の教理は「教会ノ立チモシ、倒レモスル条項(Articulus stantis aut cadentis ecclesiae)」(V・E・レシャー)であり、A・E・マクグラスに言わせれば、「宗教改革はその内面から考えると、まさに、アウグスティヌスの教会論に対する彼の恩恵論の決定的勝利である」(ウォーフィールド)が、その恩恵論が改革派にあつては「予定論」としてテーマ化されたとすれば、ルター派においてはまさに「義

「認論」を中核に展開されてきたからである。⁽²⁾

では、義認 (Justificatio, Justification, Rechtfertigung) とは何か。まず聖書から最も代表的な典拠をあげるとすれば、ロマ書三章の次の言葉ということになろう。「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」(ロマ三・二二―二四)。

次にルター派からは『アウグスブルク信仰告白』第四条「義認について」、カトリックからはトリエント公会議、第六総会の「義化についての教令」から引用しておこう。後でもう少し詳しくふれるが、あらかじめ言うておけばルター派においては義認が、人を罪人のままで義人と認め宣告すること、つまり「罪のゆるし」、「宣義 (Gerechtsprechung)」に力点が置かれて論じられるのに対して、カトリックでは義認が人を義人とすること、つまり「義化」、「成義 (Gerechtmachung)」に力点が置かれて論じられている。

「われわれは、自らの功績やわざ、つぐないによって罪のゆるしと神のみ前における義を獲得するのではない。むしろ恵みにより、キリストのゆえに、信仰をとおして罪のゆるしを得、神の前に義となる。……義となるというのは、このような信仰を、神はみ前に義と認め、義とみなされるということである」(アウグスブルク信仰告白)⁽³⁾。

「義化とは、人間が第一のアダムの子として生れた状態から、第二のアダムであるわれわれの救い主イエズス・キリストによる恩恵の状態、「神の養子」としての状態への移行である」(トリエント公会議)⁽⁴⁾。

もつともカトリックにおいて義認論が、ルター派においてのように決定的な位置を持つているのかどうかについては議論が分かれる。そして、この点が「共同宣言」をめぐる論争点の一つではあった。⁽⁵⁾しかし、最終的に「共同宣言」において、義認論は両教会にとって「キリスト教教理の一部分以上のもの」、「不可欠の基準」(«unverzichtbares Kriterium»)(GE18)であり、「付属文書」(後述)においても「義認の教理は、キリスト教信仰の尺度であり試金石である。いかなる教えもこの基準と矛盾することはできない」(Anhang 3)とされたのである。そうした義認論において、両教会が基本的に合意した。だから画期的なのである。

もちろん、かかる画期的な「共同宣言」は一朝一夕にできたわけではない。それなりの歴史がある。教会史的に考えてみれば二十世紀とは教会にとってエキュメニカルの時代でもあった。二十世紀初頭のプロテスタント・エキュメニカル運動の出発点となったエディンバラ会議(一九一〇年)、半ばでのローマ・カトリックの大転換を画した第二ヴァチカン公会議(一九六二―六五年)。そして、この義認をめぐる「共同宣言」(一九九九年)で二十世紀のエキュメニズム運動は締め括られる。こうした流れの中で、義認についてルター派とカトリックはドイツとアメリカを中心に論議を積み重ねてきた(GE3参照)。そして一九九七年に「共同宣言」の最終案文が出来上がったのである。ルター派にあつては各国レベルのルーテル教会の意見も取り入れられている。しかし最終案文成立後も神学論争は続いた。エーベリンクの神学貢献感謝会での講演を契機としたE・ユンゲルの動き、ドイツ・ルター派の反対派神学者ら一五〇名のフランクフルト・アールゲマイネ紙への署名投稿、またカトリック側でも教会一致促進協議会カシディ枢機卿の最終案への留保的回答や教理聖省ラッツィンガー枢機卿の発言、更にそれへのルーテル世界連盟からの反論等々、教会間レベルや各神学者レベルで論争は続いた。⁽⁶⁾しかしながら、そうした諸論争の論点を整理し、それぞれの論点への両教会の合意的解釈を記した、「共同宣言

をめぐる公式共同声明」への「付属文書」⁽⁷⁾が一九九九年五月に発表され、そして同年十月、「共同宣言」は調印されたのである。

二、共同宣言の神学的意義

「共同宣言」の目指しているところは、端的に言って、(1)義認をめぐっての基本的真理についての合意と相互理解、そうすることによって、(2)義認をめぐっての相互の断罪をやめる(「この合意の光のもとでは、十六世紀に双方からなされた教理上の断罪は今日の相手方にはもはや適用できない」EG13)、したがって、(3)なおも相違があり、直ちに両教会が一つになるのではないとしても、それに向けて「教会の教えと生活の中で、共に引き続き努力していく」(GE43)というところにある。

また「共同宣言」は、序と第一部から第五部まで全体で四十四項目から成っているが、構成上からうかがうことのできるその特徴を次の三点にまとめることもできるだろう。(a)義認について考えるに際して、聖書から出発しているということ(第一部「義認についての聖書的メッセージ」)。(b)合意された、義認をめぐっての基本的真理の明確化(第三部「義認に関する共通理解」)。そして(c)相違点(論点)の明確化とそれへの相互理解の試み(第四部「義認についての共通理解の解明」)である。つまり、この第四部は七つの論点(テーマ)を扱っているが、そのテーマごとに三つの項目から成っており、まず両者が紛れもなく共通に理解しえた教理の内容を端的に示す(「われわれは共にこう告白する」)。そしてその後、ルター派とカトリックがそれぞれに独自の強調点や解釈を項を改めて示すのである。つまり、そうすることによってそれぞれの教理のシステムを相手の

立場に立つて考慮し相互に理解しあうことができるのである(「なお残っている相違は、義認の理解の用語、神学的構成、また強調点におけるものであって、受容できるものである」GE40)。

さて、こうした目的と特徴をもつ「共同宣言」であるが、その神学的意義は何であろうか。一言で言えば、繰り返しになるが、義認をめぐるすべての基本的真理について合意が成立したということである。全てについて合意したわけではない。しかし、これはまことに注目すべきことなのだ。W・パンネンベルクも次のように最大限に評価している。「これは、宗教改革時代以来、初めて教会が、宗教改革のときに分裂してできた溝を越えて歩む公式の一步である」⁽⁸⁾。では、その合意された、義認をめぐるすべての基本的真理とは何であろうか。その総括的表現がGE15に記されている(同じ文章が「付属文書」二にもあえて再録されていることから、その重要さがわかる)。

「われわれは共にこう告白する。われわれは、われわれの側のいかなる功績によってもなくキリストの救いのみわざへの信仰において、恵みによつてのみ、神によつて受け入れられ、聖霊を受ける。この聖霊がわれわれの心を新たにし、よきわざへとわれわれを備え、召し出す。(Gemeinsam bekennen wir: Allein aus Gnade in Glauben an die Heilstat Christi, nicht auf Grund unseres Verdienstes, werden wir von Gott angenommen und empfangen den Heiligen Geist, der unsere Herzen erneuert und uns befähigt und aufruft zu guten Werken) (GE15)

このGE15には、三つの強調点がある。(1)義認は、信仰において、神の恵みによつてのみ起るということ、

つまり、いわゆる「信仰義認」(「…信仰において、恵みによってのみ、…」)。(2)ルター派的「宣義」とカトリック的「成義」への義認論の二極化の克服(「…神によって受け入れられ、聖霊を受ける。この聖霊がわれわれの心を新たにし、…」)。(3)義認の実としての「善きわざ」(「…よきわざへとわれわれを備え、召し出す」)。この三点が合意された、義認の基本的真理の中心的内容と思えるが、それがGE15に凝縮されて文章化されているのである。「共同宣言」の中の他の箇所から、同じ内容を表している代表的な文章を拾いだしておけば次のようになる。

- (1) について「われわれは共にこう告白する。すべての人々はその救いのためには神の救いの恵みに完全に依存する。……義認はただ神の恵みによつてのみ生起する」(GE19)。「われわれは共にこう告白する。罪人はキリストにおける神の救いの行為を信じる信仰によって義とされる」(GE25)。
- (2) について「われわれは共にこう告白する。神は恵みによって人間の罪を赦し、同時に人間をその生において罪の奴隷とする力から解放し、キリストにある新しいいのちという賜物をお与えになる」(GE22)。
- (3) について「われわれは共にこう告白する。よい行い——信仰と希望と愛の内におけるキリスト者の生——は、義認につづき、義認の実である」(GE37)。

三、共同宣言の論争点

「共同宣言」については様々なことが論じられたが、あえて大きく整理すれば、神学的論点として次の三点にまとめることができるだろう。(1)そもそも「義認」とは何か—Gerechsprachung (宣義)とGerechmachung (成

義)をめぐって。(2)「信仰のみ (sola fidei)」の問題—cooperatio (神と人の協働)と mere passive (ただ受動的)をめぐって。(3)「罪」の問題—concupiscentia (欲望)と simul iustus et peccator (義人にして同時に罪人)をめぐって。

(1)そもそも「義認 (justificatio)」とは何であろうか。すでに前述したように、ルター派は義認の内容として「罪のゆるし (Sündenvergebung)」と考え、したがって罪人のままで義人と宣告される、つまり「宣義 (Gerechsprachtung)」と扱えた。それに対しカトリックは義認を義人となること、「義化」、つまり「成義 (Gerechtmachung)」と扱えている。(したがって訳語においても、今日ではほぼ「義認」で統一されつつあるが、従来はプロテスタントでは「義認」、「宣義」と訳し、カトリックでは「義化」、「成義」と訳されてきた)。つまり義認の扱え方が、宗教改革以降、「宣義」と「成義」に二極化していったのである。

しかし「共同宣言」は次のように考える。「共同宣言」の第四部二節の表題が「罪のゆるしと義とすることとしての義認 (Rechtfertigung als Sündenvergebung und Gerechtmachung)」となつているように、義認というものを、救済の総体的過程と捉え、ルター派的な「宣義(罪のゆるし)」の側面もあれば、他方、カトリック的な「成義」の側面も含みうるものと考えるのである。実際、「付属文書」では、はっきりと「義認は罪のゆるしであり、義とされることである (Rechtfertigung ist Sündenvergebung und Gerechtmachung)」(Anhang 2-A)と明記されている。宣義と成義への義認論の二極化の克服である。GE 22には、こう書かれている。「われわれは共々にこう告白する。神は恵みによって人間の罪をゆるし、同時に人間をその生において、罪の奴隷とする力から解放し、キリストにある新しいのちという賜物をお与えになる。……罪のゆるしであれ、また神の「人を」聖となさる現臨であれ、……神の恵み深い行為のこれらの二つの側面は分離されるべきではない」。

さて、かかる「共同宣言」の義認論に対しては、当然、批判が生じた。罪のゆるしや宣義は義認であるが、その義認と聖化はやはり分けて考えるべきではないか、義認の中に生の革新、つまり希望と愛の生を含めることによって、それは行為義認に道を開くことにならないか、「恵みのみ」、「信仰のみ」の危機である。あるいは逆に、義認に連動する生の革新をもっと強調することによって、更に成義の側面にこそ光をあてるべきではないか、等々……。結局、考えてみれば「共同宣言」をめぐるなされた様々の批判や論争、つまり *sola fide*, *cooperatio*, *concupiscentia*, *simul iustus et peccator* などの諸問題も、要するに、この「宣義」と「成義」の関連をどう考えるかに最深の根をもっているように見える。

そこで、もう一度、ルター派の義認論、またカトリックの義認論をここで吟味してみなければならぬ。ルター派の義認論は一言で言えば、もちろん「信仰義認」ということになる。ルターは言う。「(神は)われわれの行為なしに、信仰によってのみ義としたもう」(「義認をめぐる討論」、一五三六年⁹)。そして、かかる義認は、ルター派にあつてははじめのうちは宣義でありつつ同時に成義でもあつた。「われわれが……明らかにしてきたのは、われわれが信仰のみによつてキリストのゆえに罪のゆるしを受けること、そしてわれわれが信仰のみによつて義とされる……という大きなことが明らかになるためであつた」(「アウグスブルク信仰告白弁証」四条¹⁰)。ところが、やがて義認から聖化がはつきりと分化され、成義の側面ははなはだうすくなる。¹¹「再生と聖化も仲保者キリストの恵みのわざであり、聖霊の働きであるけれども、神の前での義認の条項もしくは事項には属さず、これにつづくものである」。「神の前での信仰の義は二つの部分から、すなわち、恵みをもつてなされる罪のゆるしと、再生もしくは聖化とから成り立つ」という教え¹²は、……斥けられねばならない」(「和協信条」根本宣言・第三条)。義認において、神の恵みとは言ふなれば(モノでなく)神の意志、つまり「神の愛顧・好意(*favor*

Dei)』なのであり、その愛顧によってわれわれに帰せられる、その義はわれわれの義でなく「別の義 (aliena justitia)」、つまり神の義であるゆえ、それをわれわれは受動的に与えられるのである。〔受動的な義 (justitia passiva)〕。別の言葉で言えば、神の義が転嫁され (「義の転嫁 (imputatio justitia)」)、実は罪人でありながらもいわば法廷的に (forensisch) 義と認められ義と宣告されるのである。つまり、これが「罪のゆるし」であり「宣義」、すなわちルター派的な義認ということになる。

こうした「罪のゆるし (宣義)」としての義認を主張するルター派に対して、カトリックは「成義 (義化)」を主張する。「義化とは単に罪が赦されるだけではなく、人間が自発的に恩恵と種々の賜物とを受け入れることによる内的人間の聖化と一新である」(トリエント公会議¹³)。カトリック的に言えば、義認とは神の恵みが単に「愛顧 (好意)」としてでなく、いわばモノとしての「賜物」として注入 (「注入される恵み (gratia infusa)」) されることによって、実際、事実、人が義人になる、すなわち「成義」のことなのである。したがって次のように言われる。「人が義とされるのはキリストの義の転嫁だけによる、または罪の赦しだけによるものであって、聖霊によって人の心に注入され、そこに内在する恩恵と愛はこれに無関係である、またはわれわれを義とする恩恵は神の好意 (愛顧) にすぎないと言う者は排斥される」¹⁴。ところで、このトリエント公会議の言葉を、ルターの立場から北森嘉蔵は次のように分析している。「これは、ローマ教会において「恩恵」が「注入される恩恵」(gratia infusa)として実体的な概念となつていることを示し、これに対して、プロテスタント教会において、恩恵が「帰与 (転嫁) される恩恵」(gratia imputa)として、人格的な関係概念であることを示している。神の「好意」(favor) は、実体的な「恩恵」(gratia) と区別される人格的な関係概念である」¹⁵。ここで北森は、カトリックの義認論の実体論的性格 (「注入される恩恵」!) を批判しているのである。義認とは、すぐれて神と人との

人格的な関係性の問題だと北森は言いたいのである。

かかる北森のカトリック的義認論への批判（実体論的性格の批判）も確かに一理あるが、しかし、カトリックの義認論が本当に言いたいことは、「実体—関係」という枠で考えられていることは少しちがうところにあるように思える。カトリックが「成義（義化）」として義認を把えるのは、人間の救済というものをより総体的・過程的に把えたいためである。すなわちカトリックにおいては、義認というものが救済のプロセス全体として考えられている。五つの主要な局面がある。トリエント公会議の第六総会「義化についての教令」によれば、次の五局面である。①先行的恵み→②準備→③義化（義認）→④よき業の功績→⑤永遠の生命。「義化についての教令」には次のように記されている。¹⁶⁾

- ① 先行的恵み（*gratia praeveniens*）。「この義化は、イエズス・キリストによる神の先行的恩恵によって始まるものである。言い換えれば、彼らの功德は少しもなかったが、神の招きによって始まるものである」。
- ② 準備（*praeparatio*）。「その結果彼らと呼ばさませ、助ける神の恩恵によって、罪をもって神にそむいた者が、その恩恵に自由に同意し、協力して、彼ら自身の義化に心を向けるように準備するのである」。
- ③ 義化（義認 *justificatio*）。「義化とは単に罪が赦されるだけではなく、人間が自発的に恩恵と種々の賜物とを受け入れることによる内的人間の聖化と一新である」。「すなわち、神から与えられたこの義によって、われわれは霊的に刷新されるのである。したがって、われわれは単に義人とみなされるだけでなく、実際に義人と呼ばれ、また義人なのである」。「したがって、イエズス・キリストに接木され、かれによって罪の赦しとともにこれら一切のものが注ぎこまれる。すなわち、信仰と希望と愛とを受ける」。

- ④ よき業の功績 (meritum bonorum operum)。「再生された者はまことのキリスト教的義を受けて、アダムが不従順によって彼自身とわれわれのために失った衣の代わりに、キリスト・イエズスによって与えられた『最もよい衣』(ルカ一五・二二)を清く、汚れなく保つことを命じられる」。「キリストの恩恵によって受けた義は、『信仰が善業に協力して』(ヤコブ二・二二参照)増大し、ますます義化されるのである」。
- ⑤ 永遠の生命 (vita aeterna)。「(キリストによって与えられた)その衣を着て、われわれの主イエズス・キリストの法廷に立ち、永遠の生命を得る」。

このようにカトリックでは義認が救済の総体的過程として把えられ、そのプロセスに神の行為(①、③、⑤)と、それに対応する人間の行為(②、④)がふくまれている。しかし、もちろん「先行的恵み」が救済の全過程を始動させるのであって、全ては究極的に神の恵みからのみやつてくる。これがカトリックの義認論である。つまり、カトリックでは救済の全過程として義認論が組み立てられているのに対して、ルター派の場合はその救済の最も主要な源泉となる一点に収約する形で義認論が組み立てられているのである。そこには明らかに教理の組み立て方(システム)の違いがある。しかし、必ずしも矛盾しあうわけではない。それゆえ「共同宣言」も可能になったのである。

実際、ルターその人は、後のルター派の展開とはややちがひ、義認の把え方について、いわば「宣義」と「成義」の両面を、もちろん前者を中核にはあるが考え合わせていた。たとえばルターは次のような言い方をしている。「人は義であるがゆえに、神から「義と」見なされるのではなく、神から「義と」見なされるがゆえに、義なのである。しかし律法の行為を充たす者でなければ、何人も義と見なされない。しかしキリストを信じる

ものでなければ、何人も「律法の行為を」充たさない⁽¹⁸⁾」。北森嘉蔵は、ルターの義認論を論じて、終始、カトリックのトリエント公会議については厳しい見方を崩していないが（第二ヴァチカン公会議以前という時代的制約もある）、ルターに関しては「宣義論の内的弁証法」（レーヴェニヒ）という表現を手がかりに次のように解釈している。『弁証法』とは、否定媒介的・他者媒介的な論である。「ルターの」宣義論が弁証法をもっており、しかもそれが内的弁証法であるというなら、宣義論は自己の本質の内に、宣義にとって否定的他者を含んでいる、ということになる。宣義にとっての否定的他者とは、人間自身の「行為」や「愛」である。……「つまり」宣義論が内的弁証法をもつということは、厳密な意味での宣義論即赦罪論が公理として確立しているままで、しかも自己の本質の内に自己にとつての否定的他者たる倫理的現実を含んでおり、従つて成義論に通じるものをもつ、ということである。……古典的な表現をもつてすれば、『信仰のみ』（*sola fide*）が『信仰と行為』（*fides et opera*）を自己の内に含んでいるのである⁽¹⁹⁾」。

かかるルターの義認論は、したがって十二分にカトリックの義認論と相互理解的に相互解釈が可能である。事実、カトリックのルター学者O・H・ペッシュはルターの義認論とトマスのその近さを比較検討しているし、⁽²⁰⁾同じく「カトリック」のH・キュングも直接にはバルトの義認論とトリエントのそれを扱った書物の中ではあるが、まるで宗教改革的な義認理解ではなからうか、と思える見解を示しているのである。『義認』という言葉そのものは、……義と宣することであつて、内的更新を……言い表わしていない。ではその結果、神の宣義は、何ら内的更新を意味しないという結論になるのか？ 反対である！ すべては、神の義と宣することが問題であつて、それは人間の言葉ではない『力をもつて働く主の声（*Vox Domini potens in virtute!*）』である。神の言葉は……その語ることを行なう。……神の義の宣言は、神の義の宣言であると同時に、行為において義

とすることでもある²¹⁾」。

(2) 神学的論点の第二は、「信仰のみ (sola fide)」の問題である。カトリック的用語 *cooperatio* (「神と人との協働」) あるいは、ルター派的用語 *mere passive* (ただ受動的) が問題となる。

さて、この問題においてまず確認しておかねばならないことは、「共同宣言」においては、義認はただ神の恵みによってのみ起こるという、義認の大原則が徹底して貫かれているということである。そこに曖昧なところはない。それはルター派にとっても、カトリックにとっても大原則であり同じである。「われわれは共にこう告白する。すべての人々はその救いのためには神の救いの恵みに完全に依存する。……義認はただ神の恵みによってのみ生起する」(GE 19)。同じことを言葉をかえて次のように言ってもよい。「われわれは共にこう告白する。罪人はキリストにおける神の救いの行為を信じる信仰によって義とされる」(GE 25)。いわゆる信仰義認である。したがって当然、こうも言われる。「われわれは共にこう告白する。よい行いは、義認につき、義認の実である」(GE 37)。以上をまとめて「付属文書」では誤解しようもなく、こう明示されている。「義認は『恵みによってのみ』、信仰によってのみ起る (*Rechtfertigung geschieht "allein aus Gnade" allein durch Glaube*)」(Anhang 2-C)。まさに *sola fide* (信仰のみ) である。

しかし、そうした大原則の上に立って、カトリック、ルター派それぞれに教理の組み立て方があり、それぞれの強調点もある。カトリックは神と「協力する (*mitwirken*)」という言い方をする。 *cooperatio* の問題である。しかし、それは神の義認の行為への人格な同意という意味で、それ自体、神の恵みの働きなのである。「カトリックが、人間は、人を義とする神の行為に同意することによって、義認とその受容へと備えて『協力する』と言うとき、彼らはそのような人格的な同意において、恵みの働きそのものを見ているのであって、人間が自分の

能力によって行う行為とは見ていない」(GE 20)。またカトリックは「よい行い (gute Werke)」の功績という言い方をするが、それは「恵みと聖霊の働きとによって成就されるよい行いは、恵みのうちに成長することに貢献する」のであって、それによって「神から来る義を保ち」、聖書の意味での「天における報い」の約束と「人間の責任」が考えられているのである (GE 38)。それは決して、いわゆる行為義認ということではない。

ルター派においては、*sola fide* はあまりにも当然である。「ルター派の理解によれば、神は信仰においてのみ (*sola fide*) 罪人を義とする」(GE 26)。しかも、その信仰も究極的に神が起こしたものである (「神の言葉そのものによって引き起こされる信仰」(GE 21)。つまり「ルター派は、人間は義認を受動的にのみ受け取る (*mere passive*) ことができると強調する」(GE 21) のである。 *mere passive*! したがって人間は義認に「協力する能力を持たない」(GE 21)。だが、そうしたルター派も「義認の実である」よい行為について、それは「恵みの保持」、「信仰における成長」と把える (GE 39)。「〔よい行為は〕召しを確かなものとするため、すなわち、再び罪を犯すことによって自分の召しから落ちないようにするため、なされるべきである」(「アウグスブルク信仰告白弁証」二十条十三)⁽²²⁾。こうした意味においてならば、ルター派も「協力」という言葉を使う。「和協信条」(根本宣言第二条) は次のように言う。「聖霊がみことばと聖礼典とをとおして、われわれのうちに生まれかわりと革新の働きを始めるやいなや、われわれが聖霊の力によって協力することができし、すべきであるのは、たしかなことである」⁽²³⁾。

このように「共同宣言」は、*cooperatio* と *mere passive* とを矛盾する概念とみるのではなく、十二分に相互に位置づけるという立場に立つのだが、やはりそこが問題とされ、批判の声はでてくる。カトリックが言うところの、神の行為への同意であれ、義認の実としてのよき行為であれ、やはりそこでは人間の行為が義認において

わずかであれ一定の役割をになっているのではないか。そうであれば、それは「恵みのみ」、「信仰のみ」とは言えない。カトリック的 cooperatio とルター派的 mere passive は、やはり衝突するのではないか……。たとえば、倉松功も、「共同宣言」が主張するところのカトリックの立場は、義認は恩恵の働きと一方で言いつつも、他方でそうした神の恩恵の賜物と、人間の協力によって義認が成り立つということを、わずかで認められている、そしてそれはエラスムスの自由意志論の考え方に酷似していると指摘する⁽²⁴⁾。

しかし、そうした批判は、いずれにせよ、やはりカトリックとルター派の義認論のそれぞれの組み立て方（システム）の違いを考慮に入れば、ある程度、解消しうるように思える。前述したように、カトリックの場合、救済の全過程として義認論を組み立てているのに対して、ルター派の場合、救済の源泉一点に問題をしぼりこみ、そこから義認論を展開している。カトリックが義認を最大限綱領主義的に抱えているとすれば、ルター派は最小限綱領主義的に抱えている。そこを理解していけば、「共同宣言」の主張も納得しうるのではないか、と思えるのである。

あるいは、E・ユンゲルは cooperatio と mere passive の関係をめぐって、「共同宣言」の立場を擁護しつつ次のように言う（「ローマの覚え書きへの好意的解釈」）。カトリックは神の行為への同意として神との cooperatio を抱えていくが、これをルター的に再解釈すれば「人間に起こりつつある義認への、心からなる同意 (Ja) は、信仰の原行為 (Ursak) と別物ではない⁽²⁵⁾」。そして聖霊がそうした信仰をもたらすのであり、それは mere passive である。したがって、cooperatio—同意—信仰の原行為—mere passive という具合に結びつくのである。そこにあって衝突を見る必要はない。また sola fide をめぐっても、確かにトリエント公会議でははっきりと「信仰だけで罪人が義化される、すなわち、罪人が義化の恩恵を得るためには信仰以外の何者も必要でないし、また自分

の意志で準備し、備える必要は全くないと言う者は排斥される」(No. 1559⁽²⁶⁾)と記されているが、これも義認論を過程的に展開するカトリックの立場を理解していけば、義認論が中心的なテーマとして語りつづけているいわゆる *sola fide* に対立するものではないことがわかる。パンネンベルクも GE 25 を引用しつつ、この宗教改革の中心的教理 *sola fide* が「共同宣言」において合意されたと評価しているのである。⁽²⁷⁾ ここでもう一度、「付属文書」での定式をおもい出しておこう。「義認は『恵みによつてのみ』、信仰によつてのみ起こる」(Anhang 2-C)。これが「共同宣言」の立場なのである。

(3) 第三の論点は、「罪」の問題である。具体的には、*concupiscentia* (欲望) と “*simul justus et peccator* (義人にして同時に罪人)” という二つの神学概念が問題になる。「共同宣言」の第四部四節 (GE 28、29、30) がそれらの問題を扱っているが、叙述がやや混線した感じを与える。そこで「付属文書」2-A と 2-B が、それらの論点を更に明解にすべく努めている。

さて、それらによれば「共同宣言」の主張は次のとおり。まず「義認は罪のゆるしであり、義とされることである」(Anhang 2-A)。しかし、ここで重大な問題が起こる。罪がゆるされ、義とされた人間は、では何者か？ ルター派は次のように考える。罪がゆるされ、義人と宣告されたのであるから、その人は義人である。しかし、ゆるされ宣告されたのであって罪人でないというわけではない。つまり罪人でもある。事実、その人に *concupiscentia* (欲望) は依然としてある。そしてルター派に言わせれば、かかる *concupiscentia*こそ「自己追求的欲望」であり、まさにこれが罪なのである (Anhang 2-B)。つまり、罪ゆるされ、義とされた人間は、まさに “*simul justus et peccator*” である (GE 29)。

それに対しカトリックはこう考える。罪がゆるされ、義人とされたのであるから、その人は義人である。し

かし、その人にも *concupiscentia* は依然としてある。だがカトリックに言わせれば、かかる *concupiscentia* は罪に由来し、罪へとせきたてる「心の傾き (*Neigung*)」ではあるが、罪ではない。この「心の傾き」、すなわち *concupiscentia* に人格的要素が、つまり意志で同意して行為がくわわるとき、それが罪なのである (GE 30、Anhang 2-B)。とはいえ *concupiscentia* のゆえに、人間は常に罪の力にさらされている。

「共同宣言」において、こうした「罪」の理解 (あるいは *concupiscentia* の理解) に関しては、ルター派とカトリックの間に相違があると唯一、明言されていること (GE 29、Anhang 2-B) は、注目すべきだが、しかしながら、そういう相違があったとしても、いずれにせよ、ルター派にとってもカトリックにとっても、*concupiscentia* は「人間についての神の原初の計画に対応しない」 (GE 30、Anhang 2-B) のである。そこで「共同宣言」は、そうした意味を含めて、「ルター派もカトリックも共にキリスト者を「義人にして同時に罪人」として理解できる (……Können Lutheraner und Katholiken gemeinsam den Christen als simul justus et peccator verstehen……)」 (Anhang 2-A) と結論づけている。つまり、「義とされた人は全生涯を通じて絶えず神の無条件な、義とする恵みに頼り続ける」 (GE 28) のである。

だが当然、こうした「共同宣言」の「罪」理解、*concupiscentia* 理解、*simul* 理解に対して、厳しい批判が集中した。ドイツ・ルター派の反対派の神学者たちはもちろん、カトリック教理聖省長官ラッツィンガー枢機卿も批判もしくは留保しつつけた。一体、罪や *concupiscentia* をどう考えたらいいのだろうか。義とされた人間、その人は義人なのか、罪人なのか。かかる問題群に対して E・ユンゲルがプロテスタントの立場から一定の解釈を示している。以下、それをみてゆくことにしよう。

さて、ユンゲルは「共同宣言」について「ローマの覚え書きへの好意的解釈」(一九九八年)と「枢要〔枢機

卿」の問題」(一九九九年)と、二つの論文を書いているが、⁽²⁸⁾「罪」の問題に対して、それぞれやや違った角度から光をあてている。ここでは、それらをまとめて紹介する。ユンゲルは、次のように指摘している。すなわち、カトリックにとって、罪とは神の律法への故意の違反の行為、つまり「行為の罪(Tatsünde)」だが、ルター(派)にとっては、聖書的用法にならって「人間は、ただ彼の行為[Tun]においてのみでなく、彼の存在[Sein]においても又、罪人なのである」と指摘する。⁽²⁹⁾そして、この「存在における罪」、これが原罪(Erbsünde)といわれてきたものであり、それは自己追求的欲望(concupiscentia)、あるいは不信仰となつて現れ、義認後もこれは存在であるから存在しているのである。そしてエーベリングの次の言葉を引用する。「ルターは、原罪[peccatum originale]から、個々の、いわゆる行為罪が必然的結果として出てくると考えた。つまり、個々の行為罪は、厳密な意味で、罪それ自体でなく、むしろ罪の実なのである」(「罪人としての人間——ルターの人間観における原罪」)。つまり、罪それ自体(原罪/concupiscentia/不信仰)→罪の実(カトリックがいう罪、すなわち「行為罪」)。では、罪それ自体から罪の実はいかにして生じるのか。カトリックなら言葉使いはともあれ、concupiscentia(心の傾き)に意志で同意して行為することによって、つまり人格的要素が加わる時、それがはじめて罪(行為罪)であると言うだろう。では、ルター(派)はどうか。ここでユンゲルはルドルフ・ヘルマンのルター研究に学びつつ、ルターの次のような(ルター派の神学者の間でもほとんど知られていない)考え方を紹介する。ルターは次のように言っているというのである。「欲望(concupiscentia)は確かにそれ自体、罪(負ぐ目、Schuld)である。しかし、同時に、欲望が私たちを罪のある人にするのは、この邪悪な願望と傾向に同意して、それに応じて行為するときのみであるから、不可思議にも私たちは罪(Schuld)のある人であると同時に罪のある人ではない」。⁽³⁰⁾このルターの言い方は、はなはだカトリック的でもあるが、まぎれもなくルター

的でもあつてまさに「義人にして同時に罪人」そのものである。そして、ユンゲルは次のようにも指摘する。「ルターが『行為による罪と原罪とを……そう嚴格に区別しようとしなないのは』彼の神学の特徴であるが、それはルターが、罪自体が『絶え間なく活動のさなかにある』と考えるからだ。罪は常に行動している」⁽³¹⁾。

「共同宣言」もはつきり言うように、カトリックとルター派の「罪」理解 (concupiscentia 理解) には違いがある。そして、それはその通りであるが、しかし、上述してきたユンゲルの解釈を考慮するならば、ルターの罪理解のダイナミックな深さから、カトリックとルター派のそれぞれの「罪」をめぐる教理の組み立て方や用語の違いも、十分に乗り越えられるのではなからうか。そうした意味で、「共同宣言」において、カトリック、ルター派共に「義人にして同時に罪人」としてキリスト者を規定しえた意義は大きいと思えるのである。

さて、次に、「罪」の問題に関連するもう一つの論点、「義人にして同時に罪人」についてのユンゲルの考察をみていこう。⁽³²⁾ カトリックは従来“simul iustus et peccator”⁽³³⁾ というような言い方はしなかった。なぜなら、カトリックにとって「義化とは、単に罪がゆるされるだけでなく、……内的人間の聖化と一新である」(トリエント公会議)⁽³⁴⁾ のであり、「内的人間」とは、まさに(罪人でなく)義人そのもののことだからである。だが、そうだろうか。そこでユンゲルは、この「内的人間」についてルターを手掛かりに考察していく。ルターは『キリスト者の自由』の中で、キリスト者のことを「内的人間」と呼び、次のように言う。「キリスト者は、自分自身の中ででなく、キリストの中、そして隣人の中で、つまり信仰を通してキリストの中で、愛を通して隣人の中で生きる」⁽³⁴⁾。つまり「内的人間」とは、nos extra nos esse (我々ノ外ナル我々存在) であり、関係存在 (Verhältniswesen) なのである。ルターは、こうも言っている。「わたし自身の内にありキリストの外にある私は罪人ではない」⁽³⁵⁾。つまり、関係存在である人間は、

当然、神関係と自己関係とをもつのであるが、内的人間として神の方向に自分を関係づけるとき、彼は義人なのであり、逆に、“homo incurvatus in se (自身へト湾曲スル人間)”（『ロマ書講義』）として自分の方向に自分を関係づけるとき、彼は罪人なのである。つまり、関係存在である人間は、「義人にして同時に罪人」と言える。以上、要するに「内的人間」と言えども、彼は「義人にして同時に罪人」なのであり、それはトリエント公會議で言われている「内的人間の聖化と一新」においても、言いうることなのである。

更にユンゲルは、“simul justus et peccator”は「神学的にアンバランス」な定式だとも言う⁽³⁶⁾。なぜなら、罪はすでにキリストの死と復活によって断たれ、日一日と消滅していくからである。つまり、“simul justus et peccator”という定式は変容の出来事のプロセスの定式化と言える。神は罪を義と認めるのではなく、罪人を義と認めるのである。したがって義認は、罪人存在を義人へと変容させるのである。ユンゲルは次のように書いている。「神は、私たちが神の前に義とされた後も私たちのうちに変容のプロセスをもたらず。……義とされたものが同時にいまだ罪人であるとすれば、それは罪人を義と認めるということが、義認の『始まり』であり、世の終末においてはじめて完成されるからである⁽³⁷⁾」。このように“simul justus et peccator”を理解してゆくならば、この定式は、ルターの「宣義」をも、また優れてカトリック的「成義」をも表現しえていることになる。

以上、「共同宣言」の三つの神学的論点を検討してきた。いずれにせよ、ルター派とカトリックのそれぞれの神学概念（用語）を、その教理システムの中で使用されている、その本来の意味をよくふまえた上で比較検討することが大切である。そうすると多くの問題が、基本的合意へともたらされる。もちろん、違いはある。わけても、「共同宣言」でもはつきり言明されているように「罪」理解の違いは重大である。しかし、更に重大なことは、この大きな違いにもかかわらず、「共同宣言」において義認の問題がここまで基本的に合意できたとい

う事実である。「共同宣言」の教会史的意義は限りなく大きいと信じる。

注

- (1) 「共同宣言」の原本は、ドイツ語と英語の二種ある。 *Gemeinsame Erklärung zur Rechtfertigungslehre* (Lutherischer Weltbund und Päpstlicher Rat zur Förderung der Einheit der Christen, Genf, 1997) 及び *Joint Declaration on the Doctrine of Justification* (Lutheran World Federation and Pontifical Council for Promoting Christian Unity, Geneva, 1997)。また邦訳については、『ルーテル教会とローマ・カトリック教会の義認の教理についての共同宣言』(日本福音ルーテル教会信仰と職制委員会・本教会事務局宣教室、一九九七年)を参照。なお「共同宣言」の各条文はGEIという具合に表示する。
- (2) A・E・マクグラス『宗教改革の思想』(高柳俊一訳、教文館、二〇〇〇年)、一七二頁及び一八五頁。
- (3) 『ルーテル教会信条書へ一致信条書』(聖文舎、一九八二年)、三五―三六頁。
- (4) デンツィンガー／シェーンメッツァー編『カトリック教会文書資料集(改訂版)』(浜寛五郎訳、エンデルレ書店、一九八八年)、二七四頁、一五二四項。
- (5) Jörg Baur, *Frei durch Rechtfertigung*, Mohr Siebeck, 1999, S. 72。またカトリック教会一致促進協議会のカシディ枢機卿は一九九八年六月の「回答」で、義認論はカトリックにとって、ルター派とはちがひ *regula fidei* (信仰基準) の有機的で根本的な一部としている。
- (6) この間の論争の一端については、立山忠浩「ルーテル教会とローマ・カトリック教会の義認の教理についての共同宣言」についての一考察」(『教会と宣教』第五号、日本福音ルーテル教会東教区宣教ビジョン・センター、一九九九年)、田所康「ルーテル教会とローマ・カトリック教会との間の義認の教理の共同宣言について」(『DEREK』一九号、立教大学大学院文学研究科組織神学専攻、一九九九年) など参照。
- (7) “Gemeinsame offizielle Feststellung” des Lutherischen Weltbundes und der katholischen Kirche zur Gemeinsamen Erklärung zur Rechtfertigungslehre-Anhang。以下、「付属文書」と記す。なお引用に際しては Anhang 2-A という具合に表示する。
- (8) W. Pannenberg, *Gemeinsame Erklärung zur Rechtfertigungslehre*, in: *Stimmen der Zeit* 217:11, 1999, S. 726 (邦訳は「神学ダイジェスト」八八号、二〇〇〇年夏季号、上智大学神学会、九頁)。
- (9) WA. 39, I, 83

- (10) 『ルーテル教会信条書（一致信条書）』、一七二頁。
- (11) H・G・ペールマン『現代教義学総説』（蓮見和男訳、新教出版社、一九八二年）、二八五頁参照。
- (12) 『ルーテル教会信条書（一致信条書）』、八〇九頁、八一五頁。
- (13) 『カトリック教会文書資料集（改訂版）』、二七五頁。
- (14) 『カトリック教会文書資料集（改訂版）』、二八二―二八三頁。（但し訳一部変更）。
- (15) 北森嘉蔵『宗教改革の神学』、新教出版社、一九六〇年、八八頁。
- (16) 『カトリック教会文書資料集（改訂版）』、二七三頁以下。
- (17) H・G・ペールマン『現代教義学総説』、二八六頁参照。
- (18) Luther, Die Römerbriefvorlesung, I, S. 20 (in: *Anfänge reformatorischer Bibelauslegung*, hrsg. v. Johannes Fisker)——引用は、北森、前掲書（九五頁）より。
- (19) 北森嘉蔵『宗教改革の神学』、一四一―一四二頁。
- (20) O. H. Pesch, *Theologie der Rechtfertigung bei Martin Luther und Thomas von Aquin*, Mainz, 1985
- (21) H. Küng, *Rechtfertigung*, Einsiedeln, 1957, S. 294ff.——引用は、ペールマン、前掲書（三〇九頁）より。
- (22) 『ルーテル教会信条書（一致信条書）』、三二五頁。
- (23) 『ルーテル教会信条書（一致信条書）』、七九六頁。
- (24) 倉松 功「管見…エラスムスとルターの自由意志論争」、「ヨーロッパ文化史研究」第一号（東北学院大学、二〇〇〇年三月）、一九頁参照。
- (25) E. Jünger, *Amica Exegesis einer römischen Note* (in: *ZThK*, Beiheft 10, 1998—*Zur Rechtfertigungslehre*—), S. 2 68. このエングラの論文は「共同宣言」をめぐる一九九八年六月のカトリック教会一致促進協議会のカシディ枢機卿の「覚え書き」への応答として執筆されている。エングラの立場はエキュメニカル運動を促進する、まさにこの論文の題名の通り、「好意的解釈」の立場と言えよう。
- (26) 『カトリック教会文書資料集（改訂版）』、二八二頁。

(27) W. Pannenberg, 前掲書、邦訳六―七頁参照。

(28) E. Jüngel, *Amica Exegesis einer römischen Note* (前掲、注25) 及び *Kardinale Probleme* (in: *Stimmen der Zeit* 217:11, 1999、邦訳は「神学ダイジェスト」八八号、前掲、注8)。後者の論文は教理聖省ラッツィンガー枢機卿の発言への応答として執筆された。

(29) E. Jüngel, *Amica Exegesis einer römischen Note*, *ibid.*, S.264。

(30) E. Jüngel, *Kardinale Probleme* より引用 (前掲邦訳、一二頁より引用。但し訳一部変更)。

(31) E. Jüngel, *Kardinale Probleme* (前掲邦訳、一四頁)。

(32) E. Jüngel, *Amica Exegesis einer römischen Note*, *ibid.*, S. 261ff. 参照。

(33) 「カトリック教会文書資料集(改訂版)」二七五頁。

(34) *WA.* 7, S. 38.

(35) *Von der Winkelmesse und Pfaffenweihe* (1533), *WA*38, 205.

(36) E. Jüngel, *Amica Exegesis einer römischen Note*, *ibid.*, S. 264。

(37) E. Jüngel, *Kardinale Probleme* (前掲邦訳、一二三頁)。